

## 農業から二ホンミツバチを守ろう

静岡市内中学校

久村さん

「二ホンミツバチ」という昆虫を知っているだろうか。彼らは、太古から日本に生息し、野山の植物の受粉に貢献してきた、在来種のミツバチである。

「ミツバチ」と聞くと、誰もがスズメバチやアシナガバチのような攻撃的な虫を想像してしまうことだろう。しかし、二ホンミツバチは実はとても温和な性格で、飼育すると飼い主の顔さえも認識できる、非常に賢い生き物なのだ。僕はこの二ホンミツバチを四年間飼ったことがある。

日頃の食生活でよく口にすると、レンゲやクローバーのハチミツは、ヨーロッパ原産の改良種であるセイヨウミツバチが集めた蜜だ。彼らは蜜を沢山集めるよう品種改良されているが、病気や天敵には弱いため、人の手によって飼育されることで命をつないできた。

それに対して、二ホンミツバチは全くの野生種で、野山から街にまで生息し、木の洞や古い墓地など様々な場所で巣をつくる。ありとあらゆる花から蜜や花粉を集め、受粉の手助けをすることで、日本の野山の生態系や自然を守り続けてきたといっても過言ではない。また今

では、日本の農業に欠かすことのできない大きな役割を担っている。

僕が初めて二ホンミツバチに出会ったのは、小学三年生の時のこと。ある日、友人のお父さんが飼っている二ホンミツバチを見に行ったのがきっかけだ。

僕は生き物が大好きだが、ミツバチは正直なところ怖かった。でも勧められ、静かに巣箱に近寄ってみた。

すると群れの羽音がざわついて、二匹のハチが飛んできた。僕はしばらく言われた通りに、じっとしていた。すると、彼らは再び巣に戻って行った。数秒後には、巣のざわつきは消えた。友人のお父さんによると、二ホンミツバチは巣に近づく相手を観察し、味方だと判断すれば刺してこないそうだ。さらに、彼らはその情報を群れの中に一瞬で伝えることもできるそうだ。僕はそれを聞きとても驚いた。それほど知能の高い昆虫がいるとはとても信じられなかったからだ。人間ですら、そんな情報伝達能力は持っていない。

僕は二ホンミツバチに強い興味を抱き、飼ってみたいと考えた。空の巣箱を借りて、近くの山に設置した。そして、桜の花が散るころに巣分けする野生の群れを待った。

四月の終わり頃、数匹の偵察の二ホンミツバチが僕の巣箱にもやって来た。僕は群れが来るのを期待し、わくわくしながら日に何度も待ち箱を見に行った。

その数日後、巣箱を見に行くと、どこからかうなるようなもの凄  
音が聞こえてきた。それはミツバチの羽音だった。そして空から金色  
の雲が現れた。雲は僕の巣箱に吸いこまれるように次々と入ってい  
た。その光景は、今でも脳裏に焼きついている。その後も多くの群れ  
を飼ったが、この場面に出遭うことができたのは、これ一度きりだ。  
しかし、彼らとの別れはある日突然やってきた。

昨年7月頃のことだった。僕の二ホンミツバチに異変が起こった。  
蜜を取りに行った働き蜂が帰らず、また、巣箱の周りに死んだ蜂が多  
く見られるようになったのだ。生き残った蜂の中にも、弱ってのたう  
ち回っている者が何匹もいる。僕はそれを見てとても心配になり、餌  
の砂糖水をあげたりした。しかし効果はなかった。三群の二ホンミツ  
バチは、数日のうちに全滅してしまった。後には、蜜の入った真新し  
い巣を残して。

僕にとって二ホンミツバチは家族同然の存在だった。あつという間  
の別れに僕は呆然とし、深い悲しみに暮れた。

友人のお父さんにすぐ連絡をした。すると、彼のところでも、この  
二、三ヶ月中に三分の一近くが、同じように全滅してしまったという。  
僕はあまりの事に、啞然としてしまった。

二ホンミツバチを短期間のうちに死に追いやった犯人を特定するた  
め、僕は本やインターネット、二ホンミツバチのネットワークを使い、

調べに調べた。

その犯人は、農薬だった。蜜を残して死に絶える様子や、働きバチ  
がのたうち回る行動が決め手だった。

近年多く使用されている、ネオニコチノイドという農薬が、ミツバ  
チに悪影響をもたらしている犯人だ。この薬剤はミツバチの神経を破  
壊する。そのためこれが一度散布されると、半径二キロメートル以内  
のミツバチは全滅するか、弱ってしまう。

更にネオニコチノイドは、毒性が高いことだけでなく、非常に残留  
性が高いことでも有名だ。

一度散布された農薬は、普通数ヶ月で分解される。しかしこの農薬  
は、土壌や地下水に浸透し、無毒化されるには何十年という年月を要  
するのだそうだ。

ミツバチに被害が及ぶ原因は、その用途の広さにもある。この農薬  
は、農家ではミカンやナシなどの果樹、コマツナやホウレンソウなど  
の野菜、更にはイネに至るまで、ほとんどの作物に使用される。また、  
松林、公園の木、街路樹、花壇に至るまで、どこにでも散布されてい  
る。

もし二ホンミツバチが絶滅したら、日本の農業は崩壊する。何十ハ  
クターにも及ぶ果樹の受粉を、人の手で行うことになるからだ。実  
際に世界にはそうした地域が広がりつつある。既に中国や韓国の一部

でもそうだ。

こんなことにならないようにするために、僕は毒性、残留性の低い農薬の使用を義務づけるべきだと考えている。欧米では既に、「脱ネオニコチノイド」の動きが始まっている。日本でも規制を強めていく必要があるのではないだろうか。僕は有機栽培の野菜を食べている。皆さんにもそうしてほしい。

また、僕は農薬の使い方を見直すべきだと考えている。もし作物に害虫を見つけたら、その天敵である鳥を呼ぶことができる。アブラムシが発生したら、その天敵のテントウムシを放すことができる。また、街路樹や公園の木にも徹底して農薬を撒こうとするその姿勢にも疑問を覚える。自然とは、昆虫、鳥、植物、全ての生き物を含めて成り立つものなのだ。昆虫が姿を消すと、鳥の姿も消える。鳥の声も聞こえず、ミツバチの羽音も聞こえない。そんな町を僕たちは求めているだろうか？

二ホンミツバチを守るため、日本の農業を守るため、ネオニコチノイドに声をあげよう。残された時間は、もう長く存在しない。